

南半球便り（その 23）：ナショナル・プレス・クラブ

7 月 26 日

先週、キャンベラのナショナル・プレス・クラブ（全豪記者協会）で講演をして来ました。汗顔の至りですが、その貴重な経験を共有させてください。

1. ナショナル・プレス・クラブ

「全豪記者協会」は、元々、オーストラリアのマスコミ記者が、豪州政府の首相、閣僚や高官の話を恒常的に聞くことができる機会を作るために設けられた由。毎年一回は豪州首相がスピーチをすることになっている、格式高いクラブです。したがって、外国大使が講演をすることは非常に限られています。



歴代首相の写真が並ぶ

2. 貴重な出番

今回私にお鉢が回ってきたのは、クラブ関係者から日本大使の話を聞きたいとの誘いがあったからです。当然のことながら、現下の地域情勢や豪州が抱えている貿易問題が念頭にあって、声がかかったものと思われます。日本大使の登場は6年ぶりとのことであり、千載一遇の大事な機会となりました。



モデレーターを務めたナショナル・プレス・クラブ会長ローラ・ティングル氏
(出典：ナショナル・プレス・クラブ)

3. 総力結集

キャンベラへの着任後、ほぼ毎週一回は講演をしたり、マスコミのインタビューに応じてきているので、講演自体に抵抗はありません。「口舌の徒」である外交官の大事な職務でもあります。でも、流石に「ナショナル・プレス・クラブ」となると話が違います。

歴戦の強者の記者が集うだけでなく、講演とその後の質疑応答を含め、フルに一時間のやりとりが豪州全土に生中継でテレビ放映されるからです。

私は講演によっては自然体で原稿なしで臨むのですが、流石に 30 分間、多くの記者の前で真面目な話をするとなると、そうもいきません。準備に抜かりがあってはならぬと弁え、大使館の優秀な日本人、豪州人スタッフと首っ引きで相談し、原稿を練りに練り上げました（スピーチ原稿は[こちら](#)でご覧いただけます）。

4. テーマ

折角の機会なので、「日豪関係の現在と展望」と称して、これまでの実績、特に最近 15 年間の進展を説明し、それを踏まえた上で今後の 15 年間の展望を述べてみることにしました。分野的には、(1)貿易・投資といった経済面での協力（特に、貿易、インフラ整備、宇宙協力）、(2)水素の開発などの気候変動問題への対応に当たっての協力、(3)東シナ海や南シナ海を舞台とする安全保障面での協力を中心として、包括的に論じることを試みた次第です。

個人的に拘ったのは、話が単調で平板にならないよう、各セクションに一回はジョークや小話を交えるようにしたこと。その際、外交官としての豪州社会への知的関心と愛着を表現すべく、特に意を用いました。

5. 「特訓」の甲斐無く・・・

大一番だったので、原稿完成後、にわか仕込みの「特訓」に励みました。大昔の受験勉強のようでした。

週末を返上しての原稿読込み。その上で、豪州人の大使館スタッフの前で、リハーサルを三度実施。講演で説得力を増し、自然な感じを出すべく、肝となるメッセージやジョークは暗記。舌を巻いたり唇をかんだりしつつ、日本人にとっては難しい英語の発音も何とか通じるように。そして、姿勢を正し、赤面物のボディー・ランゲージも入れてみた筈だったのですが・・・

蓋を開けてみた本番では、嗚呼！途中で原稿を読み飛ばして元に戻るという失敗をしてしまいました。

一部台詞の暗記と聴衆とのアイコンタクトに気をとられ、原稿を着実に追う動作が緩慢になってしまったのです。ステージの上でドッと冷や汗。「あれだけ練習したのに」という悔恨の情もこみ上げてきて、心の中はパニックの嵐でした（動画は[こちら](#)です。）

6. 笑顔に救われて

そんな中で助けられたのは、旧知の面々が会場に駆けつけて来てくれたことです。

情報機関 ASIO のデービッド・アーバイン元長官、現長官のマイク・バージェス夫妻、豪州国立大学の国際関係論大学院である国家安全保障カレッジ所長のローリー・メドカフ、大使公邸隣人で週末のサイクリング仲間であるトーマス・フィッチェン駐豪州ドイツ大使など、友人や知己の顔を見て少し落ち着きました。

7. 「チャーム・ブレスレット」

振り返ってみると、大きな救いは、当日身につけていたブレスレットから来たのでしょうか。実は、南オーストラリア州を訪問した際にリバーランドのアボリジナルの芸術家に作っていただいた日の丸をアレンジしたビーズのブレスレット（「[南半球便り（その 15）](#)」をご参照ください。）を大切にしています。その「勝負ブレスレット」を付けていったのです。講演の冒頭でも紹介しました。



ブレスレットの紹介

また、当日は、オリンピックのソフトボール日豪戦の日でした。そこで、豪州オリンピック委員会のジョン・コーツさんにいただいた五輪用ネクタイを締めていきました。

8. プレゼンの道は険し

終わってみると、改めて我々日本人にとって口頭でのプレゼンテーションは本当に難しいと実感しています。日本の学校教育で一番欠けている部分でもあります。当日の動画を見ると、顔から火が出るほど恥ずかしい限り。同時に、「ああ言えば良かった。」と思うと、夜も寝られなくなります。

少しでも改善・上達できるよう、引き続き精進と鍛練を重ねていきたいと思います。日本の外交官が売り込むべき「日本」と「日本人」という素材は、限りなく上質のものであります。

山上信吾